

手を合わせいただきます、

尊いのちにありがとう

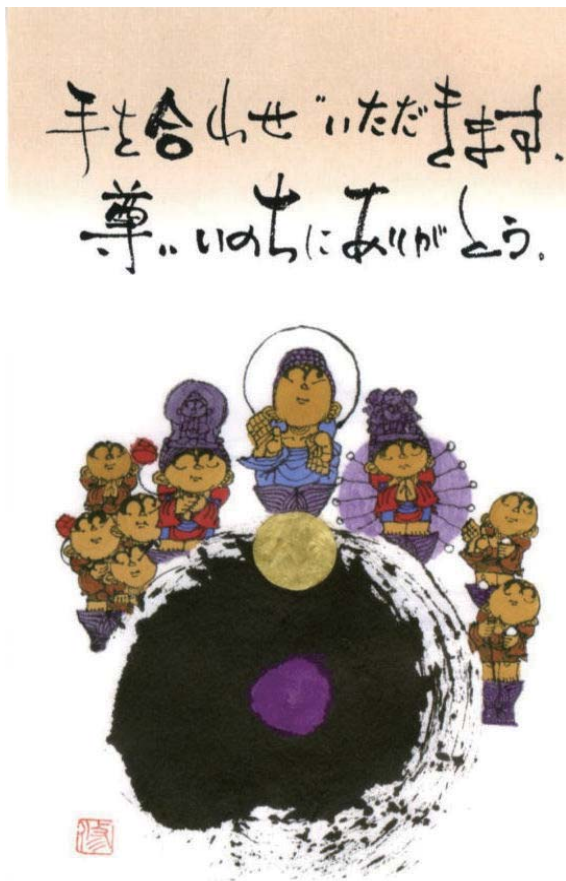
近頃、めったに合掌して食事をいただくのを目にすることがなくなりました。以前でしたら外食の時さえ、小さな子供が手を合わせていたのをほえましくも、見ているこちらの方が子供に教えられる思いでありました。大人になるにしたがつてテレなのか、忘れたのか、どこかにそんなことは追いやられているようであります。核家族化とか、家庭教育とか原因がどこなのかはわかりません。しかし世の中の全体的な風潮のような気がしてならないのです。いま日本は空前のグルメブームです。

世界中のあらゆるものがこの日本で食べることが出来ます。食材ひとつとってみましても、(もつと、まだまだ、よりおいしく)でありましてきりがないくらいです。

ですからテレビ番組の中で食に関するものは、チャンネルを回せば必ずどこかの局で放送されているようです。しかしその取材の中でこんな言葉をよく耳にします。

私は耳障りになって仕方がないのですが、皆様はどうでしょうか。それは次の言葉です。《おくい、はやくこれを喰うぞ、あつちも喰うぞ》。この《喰う》と言う言葉を有名なスターの方々やレポーター、番組司会者が平然と使うのです。そのような人々はまず手を合わせていただくことは稀でありますね。

親鸞聖人の伝記の一つ『口伝抄』という書物に次のようなことが書かれてあります。



神無月 聖観音菩薩・阿彌陀如来・十一面観音菩薩

親鸞聖人が関東におられたころ、鎌倉の北条氏が多くの僧侶を招いて一切経を書写しておられました。その慰勞に宴が開かれ多くの高僧の方々と共に聖人も同座しておりました。山海の珍味が多く出され、魚や鳥肉までもが出されました。多くの高僧の方々は袈裟を脱いで食事をしたきはじめました。その中で親鸞聖人のみが袈裟をとらずに食べ始めました。それをその席におられた開寿丸(後の北条時頼)がそのことに気づき、聖人の前に行つて『あなたはどうして袈裟をおとりにならないのですか』とたずねられました。聖人は『あーそうでしたな、ついつつかり忘れておりました』と袈裟を脱がれていただけでした。

それからしばらくたちましてから、再び同じような宴が催されました。親鸞聖人は又袈裟をつけられて食事をいただいております。開寿丸は『子供だと思つて馬鹿にしないで下さい。袈裟をあなただけつけられていただくのは深い理由があるでしょう。どうか私に教えて下さい』とたずねられました。聖人はしばらくためらつておりましたが『本来なら生命の尊さを説く僧侶はただけなのにですが多くの他の生命をいただけなければ生きてはいけません。しかし魚や鳥肉を食べることをの罪の深さは決して忘れてはならないことです。それでわたしはそのことを忘れないように念仏を申し、袈裟をつけ

ていただいているのです』と答えられました。

私も食べることは皆様と一緒に大好きです。しかし私に食べられるために生きている鳥や豚や牛たちではありません。それを人間の勝手な権利として当然のように『喰らう』私たち。おおくの生命に『あやまる』私であり続けるのが仏教徒としての生活の基本であります。いつでもどこでも、『喰う』のではなく『いのちをいただく』マナー『いただきます』と大きな声で・・・